尾州産地物語

―親が子に語り継ぐ―

麻沙桧枯

子　毛織物というとウールマークを連想するけど、尾州との関連はどうなの。

父　ウールの品質保証マークで、オーストラリアなど羊毛の生産国が資金を出して新商品の開発や販売促進に使ったのだよ。ある時期、尾州はＩＷＳと一体となって一大キャンペーンをおこなったよ。「触ってごらん、ウールだよ」と言う宣伝は流行語にもなった。

１４、ウールマーク誕生

昭和３９年（１９７４年）春、大きな構想が進んでいた。羽島地区の「竹羊会」が中心となってドイツで年２回開かれている国際テキスタイル見本市の日本版を開こうというものだった。はじめはアパレルへの直接販売を嫌う生地問屋からの圧力を懸念して、尾西側は否定的だったが、岩田治喜・竹羊会会長らの熱心な説得に「ニッポン・エッセンシャル・ウールマーケット」、略称「ニューム」が結成され、早くも６月に名古屋国際ホテルで第一回ニューム展を開催した。

「初回にもかかわらず、東西の問屋、アパレル、百貨店、小売店が会場に殺到して、俄然反響を呼び、新規取引先を広げるという予想以上の成果」(『ウールに賭ける』) を得て、２回目の４０年に参加者は１３社に拡大し、３日間の売上げは「３億円を上回る成約」と新聞発表された。小型ながら、わが国の有力毛織業者によるテキスタイル総合展となったニューム展の傘下企業は以下の通りである。

大同織物、岩仲毛織、渡六毛織、岩清毛織、野田健毛織、興葉繊維、野村毛織、則武、柴垣、大和毛織、鈴憲毛織、錦毛織、夫馬紡織

花々しい成果をあげたニューム展だったが、なぜか数年で幕を閉じた。「その第一の原因はカメラ業者の暗躍」（同）というものだった。カメラ業者？。それは柄を盗み、物真似をする事態が発生したのだ。類似品が出回っては、開発者の苦労は報われず、“カメラテックス”は市場を混乱させた。一部のモラルの悪さが、わが国のインターストッフ構想を壊してしまった。

３９年（１９６４年)、毛織関係者なら誰でも知っているウールマークが誕生した。国際羊毛事務局（ＩＷＳ、現ザ・ウールマーク・カンパニー）が制定したものだ。１０月にはわが国で初めての東京オリンピックが開催され、それにあわせて東海道新幹線が開通し、尾州はもちろん日本全国が高度成長に沸いた。新幹線の開通に伴い、土地代金を得た周辺農家が織機を購入、尾州産地では「無籍織機の拡大」という難題を抱えることになった・・・。

それはともかく「ウールマークは新幹線に乗ってやってきた」(『ウール美と富の世界』山下征彦著）と言われるゆえんである。

ＩＷＳのスポンサーはオーストラリアなど羊毛産出国で、本部はロンドンにあった。主たる目的は世界各地での羊毛製品の普及で、その象徴がウールマークであった。ライセンス制で世界６０か国、１万５,０００の企業が取得していた。ＩＷＳは日本での販売促進にクラブ制を取り入れ、婦人毛織物で９

つの素材を選んでプロモーションする「マテリアル９」、紳士毛織物で「メンズウールクラブ」、梳毛糸で「ウールヤーンクラブ」、紡毛糸で「ジェヌインウーレンヤーンクラブ」、ウールドレスシャツで「ウールドレスシャツクラブ」を組織、東京で各クラブが毎年２回展示会を開催して、販売促進をはかった。

圧巻は平成２年（１９００年）に千葉県・幕張メッセで開かれた「ジャパン・ウールフェア」で、５クラブメンバーが参加、国内はもとより海外からも多数のバイヤーが押しかけた。ここでＩＷＳは「新世代ウール」と言われる精紡段階で交撚するサイロスパン技術を応用した新しいウール製品を数多く発表した。この前後、合成繊維では例えば、糸を極限まで細くして織り上げた生地や、生地の表を桃のような風合いにしたピーチスキンなど「新合繊」を開発、新たな需要を国際的に生み出していた。ウールも「イタリアは原料の良さと色合いや柄行（がらゆき）で勝負してきている。それならわが国は原料の良さと技術力で勝負」（同）したのである。

これらの組織には服地問屋、紡績などわが国のウール業界のトップクラスが参加していたが、尾州からは「マテリアル９」に岩仲毛織、木玉毛織、鈴憲毛織、大同織物、中伝毛織、錦毛織、野田健毛織、早善織物、渡六毛織、吉原紡織、艶金染工、艶金製絨、蘇東興業、蘇東染絨、三星染整、岐阜三星染整、藤井整絨、「メンズウールクラブ」に今信毛織、岩仲メンズ、オカジマ繊維、キャビヤン毛織、三洋毛織、中外国島、長大、日興毛織、野村産業、橋本毛織、長谷川毛織、ブルーファイン、三星毛糸、御幸毛織、山長、吉民毛織、渡玉毛織、クラウン整絨、コスモクロス、蘇東興業、艶金興業、艶金八伸、「ウールドレスシャツクラブ」に東海毛織、山長（いずれも当時の社名、『ウール美と富の世界』）が前後して参加した。

先輩格の「マテリアル９」は当初、激しく競争していた服地問屋の“４強”である瀧定、タキヒヨー、市田、吉忠が協調して、昭和４７年（１９７２年）尾張繊維試験場（現・愛知県産業技術研究所尾張繊維技術センター）講堂で結成大会を開いた。「今まで、競争をしていた４強が、同じ土俵に上がり、共同行動をとろうというのだから驚いた。７２年と言えば、毛織物ブームの時であり、あえて協調する必要はなかった」（同）が、一時的なブームに酔うことなく「ファッションにおける素材の立場の向上」（同）を長期にわたって目指そうとしたのである。歴史的な大同団結であった。

ここに名を連ねた幾つかの会社は、その後の経済環境の変化から、倒産などに追い込まれたところもある。またクラブそのものも、主としてＩＷＳの資金援助で成り立っていたため、羊毛相場と需要の減退からくる羊毛生産国の経済危機で消滅した。

しかし、ＩＷＳのクラブ組織は尾州産地に様々な動きをもたらした。例えばメンズウールクラブが５５年（１９８０年）から行ったインターストッフへの出展はその後マテリアル９グループ有志も加わり、大きな盛り上がりを見せた。「洋服の本場、ヨーロッパへ日本製服地を輸出するということで、随分話題を集めた」（同）ものである。

用途に応じたさまざまなウールマーク